セルバンテス作、牛島信明訳「ドン・キホーテ前篇(2)」岩波文庫、岩波書店 2001 年 1 月 16 日刊を読む

遍歴の騎士とは

１．　この険阻な山に生い茂る
緑なす　いと高き　無数の
樹木よ　灌木よ　草花よ
わが不幸を疎しと思わば
せめて聖き嘆きを聞きたまえ。
　わが苦悩のあまりの激しさを
気にして乱れることなかれ
そなたらに対する償いとして
ドン･キホーテはしのびて泣きぬ
はるかなるトボーソ村のドゥルシネーアを。

　この上なく忠実なる恋人が
想い慕える姫から身を隠し
かかる悲嘆がいずこより
いかに来たるか知るよしもなし。
　《恋》がよこしまなる熱意もて
彼のやすらぎを奪いしもの
かくして樽に涙の満つるまで
ドン･キホーテはしのびて泣きぬ
はるかなるトボーソ村のドゥルシネーアを。

　むごき心根をうらみつつ
けわしき岩間に踏み入りて
大なる幸を求めて彷徨えど
茨と石くれの荒野に見しものは
つたなき運命のしるしのみ。
　《恋》は柔らかき革紐ならぬ
粗くも固き鞭で打ちすえぬ。
うなじにこの鞭をうけながら
ドン･キホーテはしのびて泣きぬ
はるかなるトボーソ村のドゥルシネーアを。

２．かくして、サンチョは山あいの道を奥深くわけ入り、司祭と床屋はとある谷間に残った。そこにはおだやかな渓流が走り、あたりの岩や大きな樹木が心地よくも涼しい陰を投げかけていた。それは 8 月のある日のことであったが、その地域の 8 月といえば焼けつくような暑さが普通であり、おまけに時刻は午後の 3 時ときていた。こうした条件のもとであったから、川べりの木陰というその場所はことさら快適で、サンチョの帰りを待つにはもってこいであった。そして、二人は実際にそこで待ったのである。

さて、司祭と床屋がその木陰でゆったりと憩っていたとき、二人の耳もとに、別に楽器の伴奏があるわけでもないのに、いかにも甘美に心地よく響く歌声が届いた。二人が少なからず驚いたのも道理で、そのあたりにこんなに美しい声で歌う人間が住んでいようとはとても思われなかったからである。なるほど山野や森にはこよなく美しい声の羊飼いがいるとよく言われるが、あれなど事実というよりは詩人連の美化された想像にすぎないのだ。それにしても、聞こえてきた歌が、粗野な牧夫たちの俗謡ではなく、むしろ才気ばしって洗練された廷臣にこそふさわしい詩行からなっているのを知ったとき、二人の驚きはいっそう大きくなった。次にかかげる詩行が、この事実を実証したのである―

わが幸を損なうは何ぞ？
　　軽蔑
わが憂愁をいやますは何ぞ？
　　嫉妬
わが忍耐を試すのは何ぞ？
　　別離
されば　わが心の労(いたつ)きを
癒(いや)す術(すべ)さえ絶えてなし
軽蔑　嫉妬　別離
わが希望を消し去れば。

わが胸をかくも苦しめるは何ぞ？
　　愛
わが栄誉を嫌悪するは何ぞ？
　　運命
わが悲嘆をうべなうは何ぞ？
　　神意
されば　いと訝(いぶか)しき煩(わずら)いに
わが生命(いのち)は果てぬべし
愛　運命　神意
わが破滅に手を合わせれば。

わが宿命を治癒(ちゆ)するものは何ぞ？
　　死

恋の喜びを得さしめるは何ぞ？
　　無節操
恋の苦しみを解消するは何ぞ？
　　狂気
されば　この苦悩を鎮めんと
願うは実に詮なきこと
死　無節操　狂気
これらがその手だてなれば。

　真夏の暑い昼下がり、まったく人気（ひとけ）のない所に響いた美しい声と巧みな節回しは、二人の聞き手を驚嘆させ、大いに喜ばせた。二人は、引きつづき別の歌が聞こえてくるのではないかと思って、じっと耳を澄ませていた。しかし、しばらく沈黙が続いたので、あんなにいい声で歌った男を探しに出かけようということになった。ところが腰をあげていざ出かけようとしたそのとき、また同じ歌声が聞こえてきた。それは次のようなソネットであった―

ソネット
聖（きよ）き友情よ　そなたは羽ばたき軽く
楽しげに天上の高みに飛びあがり
天使の群（む）れ集（つど）う神殿に居を定めしか
地上にはその抜け殻のみを残して。

そなたは時に思い出しては天上の
ベールに包んだ廉直なる友誼を示す
それにより時として地上に善行の願い
かいま見ゆれど　ついに見かけ倒し。

おお友情よ！　天を捨てよ　さもなくば
欺瞞（ぎまん）にそなたの制服を着せることなかれ
そは真摯（しんし）なる意図を破壊するものゆえ。

欺瞞からそなたの衣を剥（は）ぎ取らねば
この世はやがて太初の混沌のごとき
争いと不和のなかに巻きこまれよう。

　この歌は深いため息となって終った。

P.149 ～ 153

＜コメント＞
　セルバンテス作、ドン･キホーテの前篇の第 2 巻。スペイン中世文学の最高峰、ドン･キホーテにはこのような数々の美しい詩にも散見される。是非、御一読を。

― 2016 年 7 月 12 日（月）　林　明夫記―